

---

## 「報道写真」という概念の受容と変化——名取洋之助の理念と実践を通して

宋釗(復旦大学・同志社大学)

---

名取洋之助(1910-1962)は写真家であるとともに、優れたデザイナーであり、さらに先見性をもつ理論家であった。1932年、ドイツに留学して工芸美術を学んだ名取は、「レポルタアグ・フォト(Reportage-Foto)」を基とした「報道写真」という概念を日本に導入し、また自らも実践した。その当時の日本は、批評家の伊奈信男(1898-1978)が『写真に帰れ』(1932)を発表して「「芸術写真」と絶縁せよ。既成あらゆる「芸術」の概念を破棄せよ。〔中略〕写真の独自の「機械性」を鋭く認識せよ」と提唱したことで分かるように、「芸術写真」から「新興写真」への転換期に当たっていた。名取の「報道写真」もまた伊奈の宣言とともに新時代の幕を開けるものであった。

名取が紹介した「報道写真」という概念は、旧時代に対するアンチテーゼとして登場したのみならず、批判に晒されながらも新時代の礎ともなったと言える。戦後、東松照明(1930-2012)は、『アサヒカメラ』に寄稿した「僕は名取氏に反論する」(1960)において「その言葉〔報道写真〕が持つ既成の概念を破壊する」と述べた。この論争は後世に「名取＝東松論争」と呼ばれ、客観性を標榜する「報道写真」という神話を解体し、写真家の主観性を解放した象徴的な事件と捉えられることとなる。

ただし、従来の研究では、名取が語った「報道写真」と東松照明のそれには差異が見られるものの、実際には大きな違いはなかったとされている。東松自身も、自らが否定したのは名取の「いわゆる報道写真」に過ぎず、報道の「事実尊重」を否定したわけではないと主張している。とはいえ、この論争は、報道写真の衰退を示す象徴的な出来事の一つとなった。それまでは明確に定義されていた報道写真は、この時期に他の概念と次第に混同されるようになっていく。その原因には、当時の「報道写真」が、名取と伊奈の提示するような単純な理念だけでなく、より複雑で多面的な実践と意味合いを内包するようになっていたと考えられるが、従来の研究においてこの点に対する検討がまだ十分に行われているとはいえない。

「報道写真」という概念の意味は歴史の中で不変ではなく、名取洋之助でさえ自ら掲げた報道写真の理念や原則を一貫して守っていたわけではない。本発表の目標は、『光畫』、『セルパン』、『紙弾』などの刊行物を対象として、異なる立場の人物たちによる「報道写真」という用語の使われ方を分析し、この概念が戦前から戦後にかけてどのように解釈され、変容してきたのかを明らかにすることにある。さらに、そうした概念的な変遷が同時代の写真表現に具体的にどのように反映されていたのかを分析し、言説と作品を取り上げることで「報道写真」の変容を検証する。